

大路・砂田屋本『五月歌之集』『牛供養の田うへうたの次第』

— 島根県簸川郡佐田町田植歌資料 —

田 中 瑩 一

解 説

一

ここに翻刻する二書はもと島根県簸川郡佐田町大路（旧大路村）の藤原家に所蔵されていたが、当主藤原美夫氏（現在、島根県出雲市荒茅町に居住）によつて出雲市立図書館に寄贈され、現在同図書館が所蔵するものである。同家は屋号を砂田屋（なだや）と呼んだ故に、本書を「大路・砂田屋本」と呼称することとする。

それぞれの体裁は次の通りである。

『五月歌之集』 縦十三・五センチ、横十八・五センチ、半紙を四つ折りにして綴じ、表紙、裏表紙共十六丁ある。表紙（第一丁表）には中央に「五月歌之集」、右肩からやや小さく「文化三年書之」と墨書されている（写真1）。本文は第二丁表よりはじまり、一面十く十二行書き、第八丁裏二行目までで一区切りとし（以上に「さんばいおろし」七十三首が記されている）、以下第八丁裏には余白がある。第九丁表には第一行目に「くれをたもとに入て上方へのをろし」

という、見出し風の書き込みがあり、以下第九丁裏にかけて「オヤコウタ」^{注1)}五首と「ユリウタ」（「サゲ歌」）五首とが記されている。第十丁以下は文字が筆太であるが別人の筆跡ではなからうと判断される。又、第十丁以下は用紙が第九丁までと比べてやや小ぶりである。以上を勘案すると本書はもと全九丁、「さんばいおろし」の記載のみで独立した一本であったことが考えられる。そこへ、第九丁表、裏に補遺の歌が追記されたが、さらに第十丁以下「判官」の「ネリ」にはじまる一連の歌を記載した別の一本が綴じ加えられて成ったと推測することができる。後述するように砂田屋本の中にはこの「五月歌之集」を書写したと見られる別の二本の写本（天保四年書写）があつて、その内一方は本書の第九丁までを、他方は本書の第十丁以下を書写している。従つて本書の第十丁以下が綴じ加えられた時期はこれら二本の写本が書写された時（天保四年）以後である可能性が高い。

『牛供養の田うへうたの次第』 大きさ、用紙、綴じ方も「五月歌之集」と同様で、表紙、裏表紙共六丁ある。表紙（第一丁表）には中央に「田うへうたの次第」と記し、右肩に小さく「牛供養の」

と挿入している。右に「天保四年 大路邑」、左に「巳ノ五月上旬 此主 善五良」と墨書されている(写真2)。本文は第二丁表よりはじまる。牛供養の歌は第四丁表までで完了し、第四丁裏には次のように記されている。「牛供養のうた、来嶋村惣四郎様より最来請(「貰いうけ」か)申候 天保四年巳ノ二月朔日 此主大路村善五郎 筆者へば勝治郎」(写真3)。この記述によれば本書は、来嶋村(現、島根県飯石郡赤来町来島)の惣四郎から教示をうけた歌を天保四年に勝治郎が筆記したもので、本の所有者は善五郎であったということになる。第四丁裏末尾以下「丑若」の「ネリ」が記されており、第六丁最後尾には「書之くときは迄御座流 是迄六月五日迄に書申候 此主桶善」と記されている(写真4)。

なお藤原美夫氏から出雲市立図書館に寄贈された田植本には他に天保四年書写のものが二本ある(写真5) 仮に甲本と呼ぶ。写真6 仮に乙本と呼ぶ)。甲本は表紙とも全九丁で、第九丁末尾に「此主大路邑砂田屋善五良 病後ニ而悪筆御免 筆者米平(花押)」とある。乙本は表紙とも全九丁で第七丁表に「田植歌有増分写取り申候 此主大路邑善五良 筆者同村米平 天保四年癸巳二月吉祥日」とある。甲本及び乙本はここに翻刻した「五月歌之集」を漢字を仮名に改めたり、古体の仮名を読みやすく改めたりして仮名書き主体に直し直して成ったものである。甲本は「五月歌之集」の冒頭から第九丁裏までを、乙本は同集の第十丁から最後までを写している。なお乙本にはそのあと「牛供養の田植歌」の冒頭部分(本翻刻の歌番号5の「ダシ」の句まで)を書いているが、紙が足りなくなつて書写を中断したものと見え、その旨を叙べる書状様の書き込みがあ

る。書き込みの全体は判読困難だが一部に「不足申し書直し申候処、此分入不申候此紙壹まいほうくに可致候事に候一此紙はさかしにとし申候」云々と読める部分がある。

本書のもとの所蔵者である藤原美夫氏によれば善五郎は氏の曾々祖父にあたり、大工をしていたという。曾祖父は又三郎と言いつこの人は桶屋であつた。祖父は金次郎と言いつ木挽きであつた。桶善とは右の善五郎をさすのであろう。なお「牛供養の田うへ歌」の筆録者勝治郎、甲本、乙本の筆録者米平、「牛供養の田うへ歌」に登場する政五郎等については美夫氏は何も聞いていないことであつた。従来知られている出雲・備後系の田植本の中には書写年代が江戸期にさか上るものがきわめて少く、出雲地方ではわずかに三本(文政二年書写の「山口村田植歌解」、安政二年書写の頼原・景山本「御田植寄歌」ならびに「田植歌の寄合」)のみであつた。今回砂田屋本の出現によりあらたに江戸期の写本四本が加わることとなり、特に文化三年書写の「五月歌之集」は今のところ書写年代を明記する田植本の中で当地方最古のものということになる。

二

砂田屋本に収められている田植歌の詩型は出雲・備後・備中に広く見られるもので、「サゲ歌」(備中では「本節」安芸・石見では「ユリウタ」と呼ばれる、575/75を標準とする、音頭取りと早乙女とのかけあいであつた歌う定型歌が中心である。この歌を相当数連ねて一定の主題を叙事的に歌うが、間にとりどころ「オリ」あるいは「オリガツマ」と呼ばれる、64/64ないし43/43の詩型を持つ短小のかけ合い歌を挿入する。叙事の一まとまりを「ナガレ」

表1 砂田屋本と近隣三本との「さんばいおろし」所収歌の比較 — 数字は各本の歌番号 —

布施・漆谷本	頓原・景山本	山口・田植歌解	大路・砂田屋本	布施・漆谷本	頓原・景山本	山口・田植歌解	大路・砂田屋本	布施・漆谷本	頓原・景山本	山口・田植歌解	大路・砂田屋本
			55		240 242	9	28				1
29	270		56	14	241	12	29				2
	270		57		244		30				3
30	271		58		249		31		217	2	4
	272		59		246	27	32		218	1	5
	275		60	17	245	25	33	1	219	5	6
	276		61	18	250		34	2	220	11	7
36	274	14	62	19	247	22	35	3	221	3	8
	278		63		248		36	15	222	18	9
	279		64	20	252		37		223		10
	277		65	21	253		38		224		11
34	280	19	66		254		39	22			12
35		20	67	23	255		40	16	225	24	13
	261		68	24	256		41		226		14
	283		69		257		42	4	227	4	15
			70	25	258		43	5	228	6	16
32	285		71	26	259	28	44	7	229	7	17
	287	29	72		260		45		230	8	18
	288		73		261	21	46	6	231		19
					263		47		232		20
11 33 37 38	234 251 262 282 284 286 289	13	砂田屋本に該当歌のないもの	27	264		48	8	233		21
(全三八首中)	(全八〇首中)	(全二九首中)			273		49	10	235	16	22
				28	265	23	50	12	236	15	23
					266	17	51		237		24
					267		52	13	238		25
					268	26	53		239		27
				31	269		54	9	243	10	27

と呼んでいるのでこの系統の田植歌を「ナガレ」形式と呼ぶことがある。

今、「五月歌之集」冒頭の、通称「さんばいおろし」と呼ばれる「ナガレ」について近隣地域の田植本所収のものと比較を試みれば表1のとおりである。表1において数字はそれぞれの田植本の翻刻に際して付せられた歌番号で、砂田屋本のそれぞれの歌に該当する歌の番号を左に並べて示した。比較の対象とした田植本は次のとおりである。

一、「出雲国神門郡山口村田植歌解」(略称「山口・田植歌解」)

島根県大田市山口町(旧出雲国山口村)伝承の田植歌に、文政二年、千家俊信(梅の舎)が注釈を付したもの。山口村は砂田屋本の伝承されていた大路村の、石見国寄りの隣村である。

『日本庶民文化史料集成』第五卷(三一書房一九七三年刊)所収。田中の翻刻による。

二、頓原・景山本「御田植寄歌」(略称「頓原・景山本」)

島根県飯石郡頓原町寺沢(旧出雲国頓原村)の景山正義氏所蔵。安政二年書写。砂田屋本「牛供養の田うへうたの次第」に見える来嶋村は頓原村の隣村である。『田植歌本集』三(三弥井書店一九七四年刊)所収。田中の翻刻による。

三、布施村寺ノ前漆谷本田植歌(略称「布施・漆谷本」)

島根県邑智郡大和村布施(旧石見国布施村)の漆谷毅氏所蔵。書写年代不明。この書は主として安芸・石見系のオヤウタ・コウタ・オロシの構成を持つ田植歌を収めているが、その冒頭に「さんばいおろし」を置いている。出雲・石見両系の接触地域

の実情を反映しているものと思われる。『郷土石見第三号(石見郷土研究懇話会一九七七年刊)』所収。牛尾三千夫の翻刻による。

表1を見ると、砂田屋本の「さんばいおろし」と配列順に至るまで良く類似しているのは頓原・景山本で、砂田屋本に該当歌がないものは全八十首中六首(七・五%)である。山口・田植歌解も一首を除いて他はすべて砂田屋本と共通するが、歌数が少いうえに、配列順はあまり似ていない。布施・漆谷本も同様である。一方表には示さなかったが、同じ出雲地方でも飯石郡をはさんで東方、仁多郡になると一層類似度は薄くなる。たとえば島根県仁多郡横田町馬木の糸原本で見ると、『田唄研究』第十六号所収。田中の翻刻による)、全五十首中、砂田屋本と一致するものは十首に過ぎず、配列順も大きく異なる。(仁多郡では「さんばい」と呼ばないで「田の神」と言っている。)

翻刻にあたっては字体を通行のものに改めた他はできるだけ原本に忠実にと心がけた。判読不能の箇所は□で示した。

参照の便のために各歌に通し番号をつけ、必要と思われる箇所に簡単な補注を加えた。

注(1)以下「オヤコウタ」「ユリウタ」「ネリ」等の術語は田唄研究会「田植歌研究用語解説」(同会編『田植草紙の研究』三弥井書店 昭和四十七年刊)所収による。

翻刻「五月歌之集」

文化三年 書之

五月歌之集

(白紙)

- 一△ いざなぎやいざなみりやうのほこのつゆ
- 女 そのつゆをちてしまとなる
- 二△ ^{をり}いざなぎのみことわ
- 女 あまのはしのうゑんで
- 三△ 田の初めひふがの里のみくぼだに
- 女 まかすのたねがはへた
- 四△ 君がため春のに出て若なつむ
- 女 我衣も手に雪わふりつゝ
- 五△ 今日ををろそと思ふなにとしやふ
- 女 まちなみよくわをだやかに
- 六△ 三拜の父ごを何とたづねれば
- 女 てんこふ天と覚たり
- 七△ 三拜の母子を何とたづねれば
- 女 瀧しやの川のじやでござる
- 八△ 三拜のたなりし月わ大月が小月か
- 女 かざりなをし田の神に
- 九△ ありかたのういたき山の宮造り
- 女 是こそ神のやしるなり
- 一〇△ 三拜の御宮を立るばんじやうは

「 一オ
一ウ

- 女 竹だが細工と覚えたり
- 二△ 三拜の宮を何とつくるには
- 女 しほさがりにけとづくり
- 三△ 三拜の御宮の前に湯を立て
- 女 湯花の初をまいらせる
- 三△ 三拜の御宮の前のわり石は
- 女 とこなる石かやらみごと
- 四△ ^{をり}とりに立てて
- 女 御宮の前に
- 五△ 三拜の生し月は幾月か九の月
- 女 十月になれば生れし
- 六△ 三拜の取り上げうばどれな
- 女 正八まんの母子なり
- 七△ 三拜のうぶ湯のしみつどこしみず
- 女 やまとの国の岩しみず
- 六△ 三拜のうぶ湯のかまわ何にがまか
- 女 きがねのかまにうぶ湯たつ
- 九△ 三拜のうぶ湯のたらい何たらい
- 女 白鉄小鉄たまたらい
- 十△ 三拜のうぶ湯のたごは何たごか
- 女 しろかねたごを手に持ちて
- 三△ 三拜のうぶ湯のひしやく何ひひしやく
- 女 きがねのひしやく取りよせて
- 三△ 三拜のうぶぎ立は何とたつ

「 二ウ
三オ

女 あさなるぬのを八つとたつ

三八 三拜のうぶぎぬはりは何にはりか

女 三ついはりでせぬいから

三八 三拜のうぶぎぬ糸は何に糸か

女 しらきぬ糸でぬいまわす

三八 三拜のうぶぎぬひもは何にとぬふ

女 末へひろがれとぬいまわす

三八 三拜のうぶぎぬまもり何につ

女 りんずにあやをつけ玉まへ

三八 三拜のちうば何とたづねれば

女 せんだの寺の千代のひめ

三八 三拜のきかへの小袖て何小袖で

女 しらきの小袖てをはだにぬす

三八 三拜のそだちわ何国六つの国

女 せんだの寺のそだち

三八 せいじんありて

女 御宮入りよ

三八 三拜の御宮入りの思たち

女 是こそ神の初めなり

三八 三拜の御宮入りののりものわ

女 しろかねこがね玉のこし

三八 三拜の御宮へ御座る供勢わ

女 三百余人と覚たり

三八 三拜の御宮のがくわ何とうつ

― 四オ

女 金なる太鼓を八つとうつ

三八 三拜の御宮やまわりめぐりてわまわりてわ

女 三まわりほど覚たり

三八 こしからをりて

女 しゆしやうにそ

三八 三拜の御宮の内へうつりてわなをりてわ

女 とんこにしやんこにもとに置

三八 三拜の御をちつきわ何々か

女 御神酒に御空取り揃へ

三八 三拜の御宮のかさり何かざり

女 りんずにあやのきりかざり

三八 三拜わ御国めぐり思立

女 是こそ神の願なり

三八 三拜の御しやうぞくわ何色か

女 からすば色でやらみごと

三八 三拜のまいたる帯わ何帯か

女 りんずの帯をびを三へまわし

三八 三拜の才たる太刀わ何太刀か

女 小金つくりにそりをみよ

三八 三拜の召したる笠わ何笠か

女 大和との笠に八つのひも

三八 三拜の召たる笠のそのすげわ

女 やすげのすけてぬいまする

三八 三拜の御手に持しわ何にくか

― 五ウ

女 とんこにしやんこにれいしやくじやう

毘八 三拜のはいたる□わ何□か

女 金くわの□をはきならし

哭八 三拜のついたるつへわ何つへか

女 七九のつへにふきをつけ

哭八 三拜わ御国めぐりのそのすかた

女 さもをとなく御すかた

吾八 御宮を○をりて

女 とりいをぬけて

吾八 三拜の引ての馬わ何馬か

女 大黒小黒名馬なり

吾八 三拜の馬乗らせる何馬か

女 あしげの馬に手つなよりかけ

吾八 三拜わとれからとれへめぐりてわ

女 つの国こへて三のの国

吾八 三拜わとこでやげんぞう六つの国

女 せんばらのべのさゝぐさ

吾八 三拜わこきやうをさして歸へらせる

女 わが国もともなつかしく

吾八 三拜の迎への馬のしく入わ

女 とらはやぐちをしなやかに

毛八 しく入る馬わ

女 だと云やとまる

吾八 三拜わとちから御座る宮の方へ

六才

女 今年のいねのほたれこそ

亮八 三拜の御宮の物わ何くか

女 しる鉄小金をり七つ

亮八 三拜の御酒まいらせるどこ酒か

女 大和の国のき酒

亮八 三拜わ御酒まいらせる盃わ

女 木の国きやかめつらしや

前後有り此歌わ後へつくゆり

亮八 三拜わ御酒まいらせるやよひさし

女 ながへのちやうし千代の酒

亮八 三拜の御盃をいたゞくにわ

女 三じやう下りていたゞく

亮八 盃を三ごん廻して差上げて

女 御手にすへてきよめる

亮八 三拜の御盃わとち廻る

女 左りへ廻り右きもどる

亮八 昨日から今日迄掛し黒たいを

女 切らば尺のまないた

亮八 黒だいのその切そめをたれまいる

女 まず三拜にまいらせる

亮八 尺のまな板に四寸あしをさいたと

女

七才

充八 まない板にまなばしにほうちやう手に持ての

女

吉八 三拜わ高間の原に上ケりてわなをりてわ

女 此田をまもる神すがた

七八 此田へは三拜の神ををろしてわなをしてわ

女 三ほ竹のたいに出来ない

三八 悦ひにわ田をこそうへ見るへきに

女 ふたもとうへて見るへきに

三八 悦ひの歌をば三つうたへばの

女 歌こへもよしよねくと

くれをたもとに入て上方へのをろし

吉八 咲た花袖に入て京町出ての

女 花賣く京町へ出ての

吉八 我殿わしのびのつまに身をやつす

女 是こそ縁の糸むすび

吉八 せまいしやうじのから笠をばの

女 差上げてきいてとふれから笠

吉八 よりどもの御供のれんがみが国わ

女 ごばんにすがりしすごろく

吉八 すごろくうつにわこいめがこざる

女 てつちにてつくにしやうざんしやうとの原もどり

九才

吉八 大山のきた山もとわすげのもと

女 なびかばなびけすげのもと

八八 大山のあの谷をくにあるすけわ

女 そうとめ笠にぬい下たす

二八 大山の上へ町口ちにある笠を

女 そうとめ笠に買下す

三八 大□殿わとれゑんとふとわばのやわたゑんと

女 やわたゑんと

三八 やわたのばゞでこまくら

女 やわた山の御かつせんに霧のまきをといた

三八 霧のまきまだも大こてを才

八八 ほぐわん様は

御座なされが

かげきよがなと

よりともこうと

ほり川御所を

大州勢を

あすまへ下る

若何よととへは

馬のりづきで

あしげの名馬

ちんふくりんの

ふさしりがいを

むながいはらび

ひやうこのあをり

むうすびたれて

八ウ

九ウ

十才

白鉄あぶみ

ぶらりとさげて
四つぐつうつて

みやこでうつた
名ちんくつわ

かみかへさせて
にしきのたづな

引取りさまに
ひらりと乗て

こしなるめぶち
するりとぬいて

しつとつうつて
とれゑんとゝわばや

あつまゑんと

六五女
あつまのひで平頼む

六六
扱ほうくわんの
あづまへ下る

その共勢を
若何よと見れば

すゝかを始め
三だん泉
才當むさし
十一オ

むらさきしきぶ

かた岡八良

いせの三郎
みかたとなして

どれゑんとゝわばよ
あづまゑんと

七女
あづまゑんと

あづまのひで平頼む

八八
扱今日の

若何よと見れば
をんなり様を

帷子に
はぎの花色
かちみまいたり

ほうけのもこわきで
しやんと結びたれて

にしきのたすき
なうげ掛て

白鉄のよ
金のゑんには

腰かけて

六八 長ひ□ならば手をしげよ入て

女 なふげ掛てとけ手をしげよ

六八 手ぐしは貫たが京くしこそな

女 かみもしなやかなてくし

六八 今日の田主の角の庭田にわ

女 思ふいねを植附て

六八 思ふいね又角田にこうそな

六八 今日の田主の庭の早稲田に

女 思ふ早稲を植附て

六八 佐だのやしるに穂掛をしての

女 苅りていたゞき穂をかけて

六八 今日の田主のにわのついにわ

女 白金こがねつきならべ

六八 今日の田主の御もんながむれば

女 ともへにかいたるまくをはり

六八 今日の田主の御もんのついにわ

女 京の石てやらみごと

六八 今日の田主のせとにし水わく

女 し水てのうていづみわく

六八 今日の田主のせとのいけ見れば

女 すみにすんたよな龜遊ぶ

六八 今日の田主の御もんながむれば

女 きがねの御もんでやらみごと

六八 田主の御もんはとこに立た御もんか

「十二オ

「十一ウ

十ウ

「十二ウ

「十三オ

女 山とのばんしよが立た

女 しのびすがたでこすげの

― 十四ウ

一三〇 今日の田主のにわのうへ木には

一三〇 十七がふり上げのたもとまだぬわぬ

女 金のつたが舞上る

女 ぬわはとのく手やり

一三〇 扱もみごとな田主のうへ木は

一四〇 そろりく手をやりそろの

女 君の御馳走かやらみごと

女 心しづかに手をやりそろの

一四〇 今日の田主のくわだんのうへ木にわ

一五〇 拾七が哥聲聞は三月の鶯の

女 本から松のうへ木なり

― 十三ウ

女 ほけきやうよむにさも似たり

一五〇 今日の田主のうへ木ばせよみれはの

一六〇 拾七か八つ細布ををる時

女 せんほんそろへのうへ木なり

女 糸より細ひ腰を

一六〇 今日の田主のうへ木なにうへ木

一七〇 乙御りよかくたをかけや乙りよ

― 十五オ

女 もとせんだんのうへ木なり

一八〇 乙御りよがかいたくたさいがはしる

一七〇 今日の田主のせんたんに花かさいたと

一九〇 十七がなさが原て布さるす

女 糸の花さきの花〇さきやごく

二〇〇 十七八ち又竿に干たる細布

一八〇 せんだんにさいた花京へだいと

二一〇 つくしからよ大利へ参るは小そうとめ

女 京てねをうつ京へ

二二〇 つくしからよ大利へ参るは小そうとめ

一九〇 今日の田主やかたよくみれは

二三〇 つくしつかい国ちよろめいたよな

女 八つむねつくりてやらみこと

二四〇 女子なれはこそちよろめく

二〇〇 扱もみことな田主のやかたわ

二五〇 きみがため手筥は貴たかけごなし

女 銭にのひわだでやらみこと

二六〇 かみこうてたもらば

二二〇 此里を通りて見ればにぎやかに田を植

二七〇 すながらこうてたもれや

是は晚の哥也

二八〇 女

女 わが恋人のこへもする

二九〇 女

二三八 わが恋人やらこすげの笠を

三〇〇 女

二三八 わが恋人やらこすげの笠を

三〇〇 女

― 十六ウ

翻刻「牛供養の田うへうたの次第」

牛供養の 天保四年 大路邑

田うへうたの次第

巳ノ

五月上旬 此主 善五良

覚

牛くよううた

- 一 一 こんにちわ政五郎様をにかいなされたうしくよう
女 みにでる人のかつじれぬ
- 二 一 京うの田にわしろだが百でにぎやかな
女 いまかくつなでわなにくか
- 三 一 京うたわそうとめが百でにぎやかな
女 ちやしにあわせててをつく
- 四 一 ちはやふるかみよのむかし田はしめ
女 ごこくのたねうへたまへ
- 五 一 八くもたいづもくわでうちはじめ
女 このあしはらをたとなし
- 六 一 このまちをきよめてけうのかみをろし
女 をめきにごくうしめかざり
- 七 一 さんばいわこのたへうりてなをりてわ
女 よのなかよかれとまもるなり

ハ△〇

一 あまのましひとましほのいねに
女 かみよのしるしあらたなり

九 一 きみがよのつきせのためしすみ
女 あさいいろわかいのまつ

二〇 一 しゆみせんのやまよりたかきくにをん
女 うみよりふかきをんぐみ

二 一 このないをうへてそだてゝいねとなす
女 みつぎをきみにたてまつる

三 一 ゆたかなるだいくゆたかとして
女 なみもにきをうよのなか

三 一 くよふにせんにんのそうをよびあつめ
女 せんぶのきやうもよまれし

四 一 京のたのうしはをまやうのくどくにて
女 みらいわかならずうかぶなり

五 一 くよふもめでとうたもにきやかに
女 せんしうらくとうへをさめ

牛供養のうた来嶋村

惣四郎様より

最来請申候

天保四年

巳ノ二月初日 此主 大路村

善五郎

筆者 へぼ

勝治郎

丑若様之くどき

一六一

うしわかさまわ	八ついしに
くらまいのぼる	大てんぐや
しよてんぐや	ししよにとりて
へほならい	九つとしに
まんれきならい	とし十さい
しりけんならい	十一としで
こたちうならい	十二としで
大たちならい	十三としで
やりなぎなたう	もとからうらまで
あいいてこんで	十四としに
このはのしたの	さかしうならい
十五のとしに	をいとまこうて
やぶれたのに	やふれたかさに
又「くるひと	又みるひと
八いけのたいしよで	あいすみござる
うしわか様も	やしろにかいる
うしわか様は	ほうくわん様
なうかいて	

―

四ウ

をんまやよりも	ういだし様は
みようちんくつわう	がんじとかませ
しんぶくりんの	くらなけしいて
しんぶのふさう	しりげにかけて
みなかいはるぶ	ずらりとかけて
京なるかわも	とらなるかわも
かたがけかけて	ばせんもうかせ
あうりもかけて	しろかにあほみ
六尺うとこに	りよく「ちとらせ
よつくうたせ	ほうくわん様の
こしらいみりば	あやうり <small>たみ</small> 豊
さんまんちどり	はちまきなざる
こしなるみほち	ずらりとないて
しゆとろとろと	どれいんどわばよ
あすまいんと	

五オ

書之くときは迄御座流

是迄六月五日迄に書申候

此主 楠 善

―

六ウ

ほうくわん様は	どれからとれい
めくるなざる	十ろらつれて
ごろつれて	みのからうわり
あうなるうまうこうて	みわらい」させて

五ウ

補注

『五月歌之集』

- *二一 何ひひしやく——「ひ」は衍字であろう。
 - *二三 うぶぎぬはり——甲本は「ぬうはり」。産着縫う針。
 - *二六 何につ□——甲本は「なををつける」。
 - *三六 詩型はヲリガツマであるが「をり」の注記はない。原本一行書き。その□——甲本は「そろよ」。
 - *四二 帯をび——「を」は衍字であろう。
 - *四四 大和と——「と」は衍字であろう。
 - *四七 □の三文字は同一の漢字であるが判読不能。「轡」か。甲本は「くつ」とかな書きしている。
 - *六一 此歌わ後へつくゆり——「ゆり」とはユリウタの謂であろう。甲本にはこの一行がない。
 - *六八 オリでコウタに相当する句が脱落している。次の六九も同じ。頓原・景山本では「尺のまないたに四寸あしさいたと／ばんぢやうじやうすがよふもさいた」(二八二)。
 - *六九 頓原・景山本では「まないたにまなばしほう一手にもちのふ／いたのまなをいたもちやうず」(二八三)。
 - *八四 かみかへさせて——甲本は「かみくわへさせて」。
 - *八九 □は判読不能。甲本は「かみ」。
- 『牛供養の田うへうたの次第』
- *十四 をまやう——「をきやう」か。「今日の田の牛はお経の功德にて」の意であろう。
 - *十六 なうかいて——「名を変えて」の意であろう。

付記

本稿は昭和六十一年度特定研究「山陰地域特性に関する基礎的研究——斐伊川流域における産業と文化の変遷——」(研究代表者 北川 泉)による研究成果の一部である。



写真1 五月歌之集

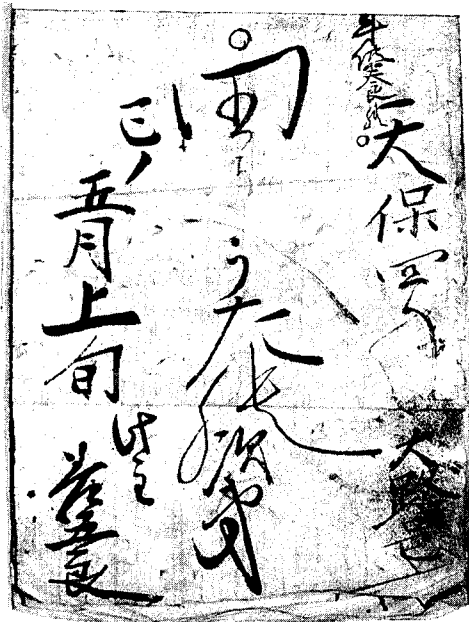


写真2 牛供養の田うへうたの次第

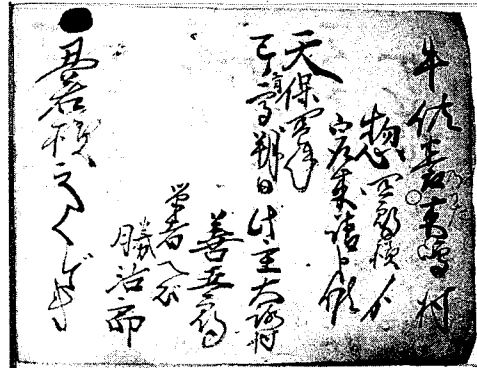


写真3

牛供養の田うへうたの次第
第四丁裏

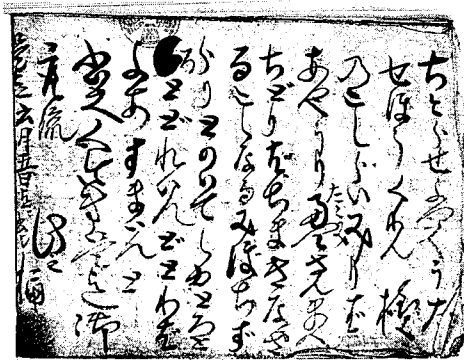


写真4

牛供養の田うへうたの次第
第六丁裏

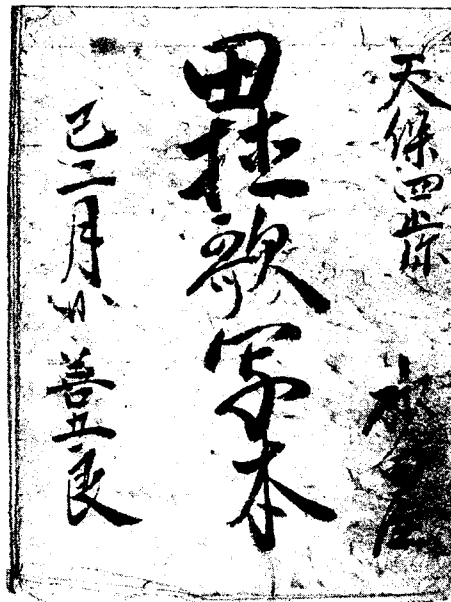


写真5 天保四年書写甲本

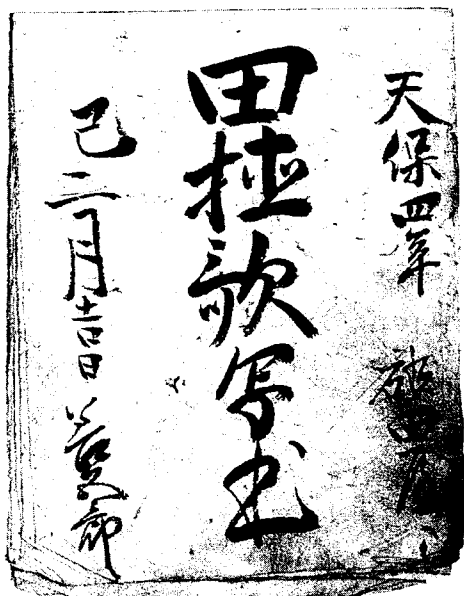


写真6 天保四年書写乙本